



派遣留学報告書

	記入日	年	月	日
氏名	安松弘毅			
所属学部・研究科	総合科学部総合科学科	学部	4	年次(留学開始時点)
学生番号	B150173			
留学先大学	University of Yangon	大学	(国名: ミャンマー)	
所属学部・学科等名	Department of Botany			
在籍身分	Exchange			
留学期間	2018年7月1日～		2018年9月9日	

1. 留学するまで

留学しようと思ったきっかけ・理由	以前旅行でミャンマーに行ったときに、周辺国との違いに衝撃を受けたが数日間の滞在で物足りず、いつかまた行こうと考えていた。そんな中、先生から、支援金をもらってミャンマーへの留学ができるプログラムができたこと聞き、参加することにした。
留学準備を始めた時期 (応募する何か月前ですか?)	派遣先大学との連絡がうまくいかなかったため、自分が準備を始めたのは渡航の一か月前
事前準備について (どのような準備をしたか、しておけばよかったか)	書類作成やビザ取得にかかる手続き等

2. 渡航について

ビザについて	ビザの種類: 教育ビザ 90日シングル
	ビザ申請先: ミャンマー大使館(東京)
	提出書類: 受入大学からの承諾書、広島大学からの推薦状、在学証明(英文)、パスポート原本、写真1枚、申請用紙、パスポートコピー1枚 以上を指示されていたが、当日 e-ticket のコピーを要求され、また数日後に戸籍謄本も要求された。(FAX 可)。他では聞いたことないといわれたので、例外か? ミャンマー大使館に直接行く場合、申請の受付は午前中のみのため注意。
	手続きに要した日数: 5日
その他必要な事前手続き	海外旅行保険
出国年月日	2018年7月1日
経路(往路)	広島→桃園→バンコク→ヤンゴン
現地での出迎え	<input checked="" type="checkbox"/> 有(大学関係者・その他) <input type="checkbox"/> 無
到着後オリエンテーショ	なし



の実施状況・ 期間・内容	
帰国年月日	2018年 9月 9日
経路（復路）	ヤンゴン→桃園→広島

3. 留学費用について

支出額	総額		210000 円	
	内訳	渡航費（航空券）	0	円（広島大学負担）
		保険料	50000 円	50000 円
		教科書代（学費）	0	円
		宿舍費	250USD/月	56000 円
		光熱費	0	円
		食費	3000kyats/日	20000 円
		交通費（宿舍－大学間）	10000kyats	1000 円
		交際費		25000 円
		その他（旅行交通費） （旅行宿泊費） （衣料費）		25000 円 15000 円 18000 円

4. 授業について

授業の概要について （カリキュラム、プログラム、履修した科目、時間数、履修形態等）	午前中は Angiosperm (taxonomic description, practical), 午後は Plant Biology (生物学, ミャンマーで行われている研究などについての情報共有など。) を週三日行った。それ以外は休み。
単位互換希望の有無	<input type="checkbox"/> 有 <input checked="" type="checkbox"/> 無
授業・勉強についてアドバイス （留学前の履修、留学中、単位取得等）	自身の専門やそれに類する知識や単語は英語で把握しておけると学びやすい。

携帯はプリペイド式のsimで、管理用のアプリケーションもあるので、わかりやすく便利。寮のWiFiも不安定なので、短期でもSIMカードを買っておくとよいと思う。

(6) 現地学生や地域との交流について（どのような、機会・きっかけがありましたか？）

多少なりともミャンマー語を使ってみたりすると、とても興味を持ってくれてコミュニケーションにつながる。連絡手段はfacebookと電話番号が主流なため、それぞれ用意をしておく、また会うことも可能になる。

(7) 習慣やマナーの違いによる対人関係等、注意すべきこと

近年変わりつつあるが、女性は飲酒や喫煙をしなかったり、付き合っていない男性と出かけるのははしたないという文化がある国で、日本と同じように接すると相手やその周りに余計な詮索をされたり齟齬を買うことがある。

(8) 日本から持っていくべきもの、持っていくべきでないもの

日常生活はロンジーで送ることが多く、正装もそれなのでズボンは最低限でよい。また雨季は服が乾かないので、乾きやすいものを中心しておくほうがいい。洗濯に関しては、二層式洗濯機か手洗いだっただが服が傷んだり色落ちで染まってしまうので、服に関しては現地でそろえるつもりで十分。天候とエアコンで温度差も激しいので、羽織れるものだけ必要かもしれない。

(9) その他生活等に関して参考となる情報・アドバイス

男性は比較的管理を受けないが、女性だと、夜一人で出歩くななんてありえない！などと、女性に対して過保護な文化がある。もちろん危機管理はしっかりするべきだが、せっかく留学に行くのならすべて鵜呑みにしてしまわず、思い切って出かけていったほうがよい。ミャンマーはほかの国に比べて安全だと思う。

6. 帰国後の進路について

卒業予定年月	2019年 3月 （当初の卒業予定年月 2019年 3月）
卒業が遅れる見込みの場合、その理由	<input type="checkbox"/> 4年次に留学したため <input type="checkbox"/> 単位不足のため <input type="checkbox"/> 新卒で卒業するため <input type="checkbox"/> その他（具体的に)
現在の状況および今後の予定・進路等	大学院進学、東南アジア地域研究
就職活動や留学前の単位取得、教育実習等についての工夫	本では得られない生の知識をつけて、院試に臨んだ。

7. 留学準備、留学中に役立った書籍、ウェブサイト等

書籍、サイト名	詳細（出版社、URL等）	コメント
地球の歩き方	ダイヤモンド社	発展が早く変化が多いので、最新のものが良い。

8. 留学を振り返って



留学を終えての感想：

ミャンマーはほかの東南アジア諸国と比べても多様な民族や人種、宗教、国籍が共存し、それぞれを認め合っている。そういった人たちと食事などしながら、それぞれの文化や立場の話を聞くことができ、ミャンマーへの理解、また東南アジアへの理解を深めることができた。今回いけなかった州や話せなかった民族もまだまだあるので、これあからもミャンマーには積極的に訪れていきたいと考えている。

後輩へのメッセージ：

ヤンゴン大学はミャンマー語専攻には多くの留学生がいるが、それ以外に関してはまだまだ国際化はしていない。自分の専攻の学部で留学するようにすると、初めての外国人、そして日本人という立場に立たされ、アイドルのような扱いを受けると同時に日本人の代表となる。笑顔を絶やさないようにし、はっきりと意見を言いながら交流ができればおのずと友達は増えていくので、楽しい日々を送れると思います。

9. 自由記述 (1200字以上)

- ・「学習に関すること」や「生活に関すること」について自由に書いてください。
- ・写真を2~3枚貼り付けてください。(各写真の容量を100KB程度まで小さくすること)

学習について、私はAngiospermとPlant Biologyという二科目をそれぞれ2, 3時間ずつ週三回履修していた。英語で教えている授業らしい、ということで選択したが、実際は先生と博物室で一对一で行う授業であった。学生との会話は英語を使っていたため、英語での授業も可能なように思えたが、現地学生向けの授業では、専門用語や教科書は英語のものを用い、それ以外はすべてミャンマー語で行われていたのである。教授の英語が拙いというのはなかなかしんどいもので、内容自体はわかっているが、英語で知らない単語を、独特のなまりで理解する必要があった。これは時間がたてば耳も慣れ、”You mean?=意味わかるか?”といった独創的な表現にもyesと答えられるようになっていった。



博物室の授業だけでなく、学外に出る機会も多かった。院進後は日本ではマイナーな民族植物学という分野の研究がしたいと話す、他民族が共存するミャンマーではメジャーな分野らしく調査に連れていってくれることになり、ダンピュツザヤの村に同行させてもらえたことがあった。現地住民を教育レベルで分け、方言の通訳を交えて、各植物の現地語名や薬用、食用といった用途や効能などについて書き記していく作業だった。調査に協力することはできなかったが、民族植物学的手法を用いた調査を間近に見学させてもらえたことにより、よりはっきりとこれからの研究をイメージできるようになった。また、課外学習として各学年のショートトリップにも参加させてもらえた。一年生とは地元の製薬会社や野菜及び果物の研究施設とパゴダ、二年生とは植物の研究施設と水の会社とパゴダを見学した。それぞれの説明はミャンマー語のみだったため、解説員に直接聞いたりして英語での説明を受けたが、こういった研究施設で特に印象に残っているのは、日本語があふれているということである。様々な器具や薬品が日本から持ち込まれたり、寄付を受けたりしているほか、コシヒカリとミャンマーのコメの比較をやっているなど、随所に日本とのつながりを深く感じた。ミャンマー、そして東南アジアへの理解を深めることが目的だったが、思いがけず様々な方面で勉強になることが多かった。



生活もとても充実したものだった。大学での生活が充実していたおかげで、たくさんのミャンマー人の友達ができ、様々な文化的背景を持つ人たちと毎日食事をともにしたり、出かけたり、お酒を飲んで語りあかしたりする日々だった。写真は現地の学生とシャンダンスを練習し、学芸会で披露したものである。伝統衣装を着て踊る機会は留学ならではの経験だったと思う。授業は週三回だったので、残りの4日は自由である。そこで私は夜行バスに乗ってエーヤワディやモン、タニンダーリ、マンガレー、シャンなど、様々な州に一人で足を運び、街の様子を眺めたりしていた。地理的な気候だけでなく、民族グループが異なったり、タイや中国との国境に近かったりすることにより、それぞれの町が異なった様相を見せていた。英語やミャンマー語はもちろんのこと、タイ語や中国語などもつかってみながら、様々な文化圏の人と交流ができた。観光業が栄えてない分スリヤぼったりもおらず、外国人に興味を持ってくれたり、助けてくれたり、人の暖かさを感じる日々を送ることができた。

